



特集 グローバル人材  
世界と手を  
つなごう

## 畑に弟子入り

Solomon Islands ソロモン諸島

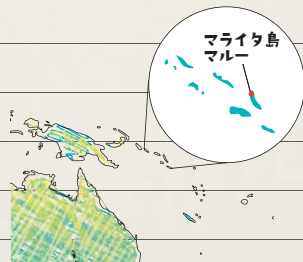


ソロモン諸島のマルーという地で畑を始めようと思い、生命が絡み合うジャングルの一角を耕していたときのことです。

炎天下で大自然の土と格闘していると、どこからともなく数人の子どもたちが集まってきました。日本から来た小さな男がくわを振り上げている姿があまりにも滑稽だったので、自然と引き寄せられてやって来たのでしょう。

「くわを貸して。こうやって耕すんだよ」「見て。イモはこの辺を握れば出てくるよ」。畑についてたくさんのお話を得意気に教えてくれました。鍛えた腕っ節で2時間働きました、と言いたいところですが、ほとんどの作業を子どもたちが進んでやってくれました。

この地で、家族や地域の人々の働く姿を見ながら日々成長していく子どもたちは、自然と“生きる力”を育んでいきます。



撮影：西山 裕介（ソロモン諸島／青年海外協力隊）

## あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録方式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真と共に応募先アドレスまでEメールでお送りください。

\*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこれ以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

## Contents

02 my photo 畑に弟子入り ソロモン諸島

## 04 特集 グローバル人材

# 世界と手をつなごう

巻頭対談 松島由佳さん × 伴場賢一さん

地域活性化で活躍 01 会津 素子さん 成田市議会議員

02 若宮 武さん ゲストハウス若葉屋オーナー

研究で活躍 横井 俊明さん (研)建築研究所国際地震工学センター長

アートで活躍 藤 浩志さん 美術家

農業で活躍 佐々木 正吾さん 「しょうご農園」代表

教育で活躍 大槻 一彦さん／池田 愉歌さん

医療で活躍 根来 信也さん／小松 美紀さん／加藤 琢真さん

毎日の生活が世界とつながる！

知ろう！学ぼう！世界のこと



24 JICA STAFF 桑江 直人 JICA九州国際センター

25 JICA UPDATE

26 Voice 吉岡 龍一 ヨシオカ農園代表

28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説！

## 30 地球ギャラリー

エチオピア

# 地の塩を食む人々



37 イチオン! 本・映画・イベント

39 MONO語り 手織りの綿布、電波塔と出会う

40 私のなんとかしなきゃ! 黒木 啓司(EXILE) ダンサー、俳優



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

©Getty Images

さまざまな人々が国際協力に参画する今。国内外の人々と手を取り合い、海外での経験を日本での仕事や活動に生かそうとする人々が増えている。日本を動かす“グローバル人材”の力に迫る



田中 お二人はお会いするのは初めてですか？

伴場 何度かお見掛けしたことはありましたが、きちんとお話しするのは初めてです。

松島 実はつい数カ月前にも、絵を描いて自分の考えを表現するというワークショップに参加した際に偶然お会いしました。

伴場 そうなんです。なかなか2時間集中して絵を

### 巻頭

## 対談

特集グローバル人材

# 世界と手をつなごう

描く機会ってないので面白いんです(笑)。

—— お二人は以前カンボジアにいらしたり、現在は日本の人々を、つなぐ活動をしていたりと共通点がありますね。開発途上国とつながりを持つきっかけは何だったのでしょうか？

松島 私は、父がカンボジアでNGOを創業し、現地に病院を建てる計画に携わっていたので、完成したときに家族で訪れたことがきっかけです。当時、私は12歳ぐらいでしたが、設備や人材も十分とは言えない環境の中、懸命に取り組む人々を見て感動し、大学時代はそこでボランティアをしたり、別のNGOで働いたり、社会人になってから国際協力に携われるように経験を積みました。

伴場 僕は、大学卒業後は地元の福島で銀行員をしていましたが、『貧困なき世界をめざす銀行家』と

いうムハマド・ユヌス氏の自伝をたまたま読んで、「自分の仕事はこれだ！」と思ったんです。それから医療系の国際NGOに転職して、カンボジアやアフリカで仕事をしました。

—— 違う世界に飛び込むことは怖くありませんでしたか？

伴場 当時はNGO自体がまだまだあまり認知されていなかったもので、周りには猛反対されました。ただ、30歳という年齢までに動かなければその先ずっと動けないと思い、28歳の誕生日に思い切って銀行に退職届を提出しました。

松島 私は大学卒業後はまずコンサルティング会社に就職しました。その理由は、これからの国際協力の形を考えたときに、民間企業やビジネスの力が重



〈聞き手〉 JICA 広報室長 田中雅彦

「グローバル人材」という言葉が頻繁に使われるようになった昨今、ビジネスやボランティアなどを通じて、多くの人が世界と関わりを持っている。一方、国内に目を向けると、こうした海外経験を生かし、多方面で活躍する人たちが増えている。共に国際協力の経験者で、現在は国内を拠点に活動を展開している二人に、これからの時代に求められるグローバル人材像を聞いた。

要になると思ったからで、ゆくゆくはNGOの世界に行くことを望んでいました。会社を辞めようと決心してからは、親を説得するために、資料を準備して自分の思いをプレゼンしました。

### 日本から離れた地で学んだこと

—— 今の仕事の中で、途上国での経験が生かされていると感じることはありますか？

伴場 東日本大震災の後、支援活動を行うために福島に戻りました。物資の配布などできることから始めていたとき、途上国と一緒に働いていた友人が来てくれて、一般社団法人 Bridge for Fukushima を立ち上げようという話になったんです。これまで開発の仕事に携わってきたので、震災後のフェーズ分け、つまり、緊急救援、復興、経済発展といった段階に分け、その段階に応じた支援計画を立てることは比較的早期にできました。

—— 途上国のプロジェクトで培った知見が生かされたということですね。

伴場 そうなんです。自分は緊急救援より復興の専門だと思いい、その中で何ができるかを考えました。その結果見えてきたのは、これから数十年単位で復興に取り組んでいく上で圧倒的にプレーヤーが足りないということ。そこで、高校生のリーダー育成事業を始め、幅広い業界の社会人から仕事の話を聞く会や、高校生が日常の中で感じる課題を発表し、解決策を事業化する活動などに取り組んでいます。

松島 私の場合は、4年前にNPO法人クロスフィールズを友人と立ち上げ、日本企業で働く社員を途上国に派遣し、現地の人々と共に社会課題の解決に挑む「留職」プログラムを実施しています。日本と異なる環境で挑戦する意味などを企業側に説明する際には、自分自身の経験が生きています。また、起



松島 由佳さん

伴場 賢一さん

NPO 法人クロスフィールズ 共同創業者・副代表

東京大学経済学部卒業。在学中、カンボジアの児童買春問題の解決を目指すNPOのスタッフとして勤務。卒業後は外資系コンサルティングファームに入社し、2011年にNPO法人クロスフィールズを共同創業。日本企業の社員を途上国のNPOなどに派遣し、現地で社会課題の解決に挑む「留職」プログラムを軸に事業を展開している。

一般社団法人 Bridge for Fukushima 代表理事

地元福島の銀行から医療系NGOに転職し、カンボジアやザンビアで事業を統括。国連食糧農業機関 (FAO) でコンサルタントとして勤務した後、JICA海外長期研修生として英ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに修士留学。社会政策学を学ぶ。2011年の震災後、一般社団法人 Bridge for Fukushima を立ち上げ、高校生のリーダー人材育成や産業育成プログラムを行っている。

業当時は何も無い状態から道を作っていくかなければなりませんでしたが、行政サービスや制度が整っていない途上国ではそれは当たり前のこと。それでも自分たちで何とかしようという行動を起こすバイタリティーは、途上国での経験から得ました。

### これからの時代を動かす力に

—— 最後に、お二人が考えるグローバル人材像を教えてくださいませんか？

松島 私は、「国境を越えて信頼を築く力」だと思います。もちろん日本人同士でも大事なことです。それが違う国の人であっても、その人の考えやバックグラウンドなどを想像し、お互いに信頼し合える力は、グローバルに活躍する人のベースになってい

ると思います。

伴場 僕は、どこに行っても誰かの役に立つ、どんな環境でも自分の色を出して最大限の仕事をするといった「自分の役割を見いだす人」だと思います。福島でも、周りのことを理解し、地域の中で自分の役割を果たしている方々を見て、たとえ海外に行ったことはなくても、どこの国でも通用する力を持つまさにグローバル人材がたくさんいるなあと感じました。

—— グローバル人材は決して特別な人ではなく、実は身近な所でも活躍しているんじゃないでしょうか。

松島 問題を他人事ではなく自分の事として考えて行動できる人は、日本社会の中でも求められている気がします。留職プログラムを通じてそういう方々がたくさん生まれていて、大きな可能性を感じています。

伴場 すごくワクワクしますよね。福島の高校生たちの将来も本当に楽しみです。



# 身近なグローバル 人材を探せ!

さまざまな人が特技や強みを生かして参加する国際協力。  
今、その経験を生かして、国内で活躍する人が増えている。  
さあ、日本を動かす身近な「グローバル人材」を探しに行こう。  
あなたは何に挑戦する？

医療で活躍 18ページへ!

研究で活躍 12ページへ!

地域活性化で活躍 8ページへ!

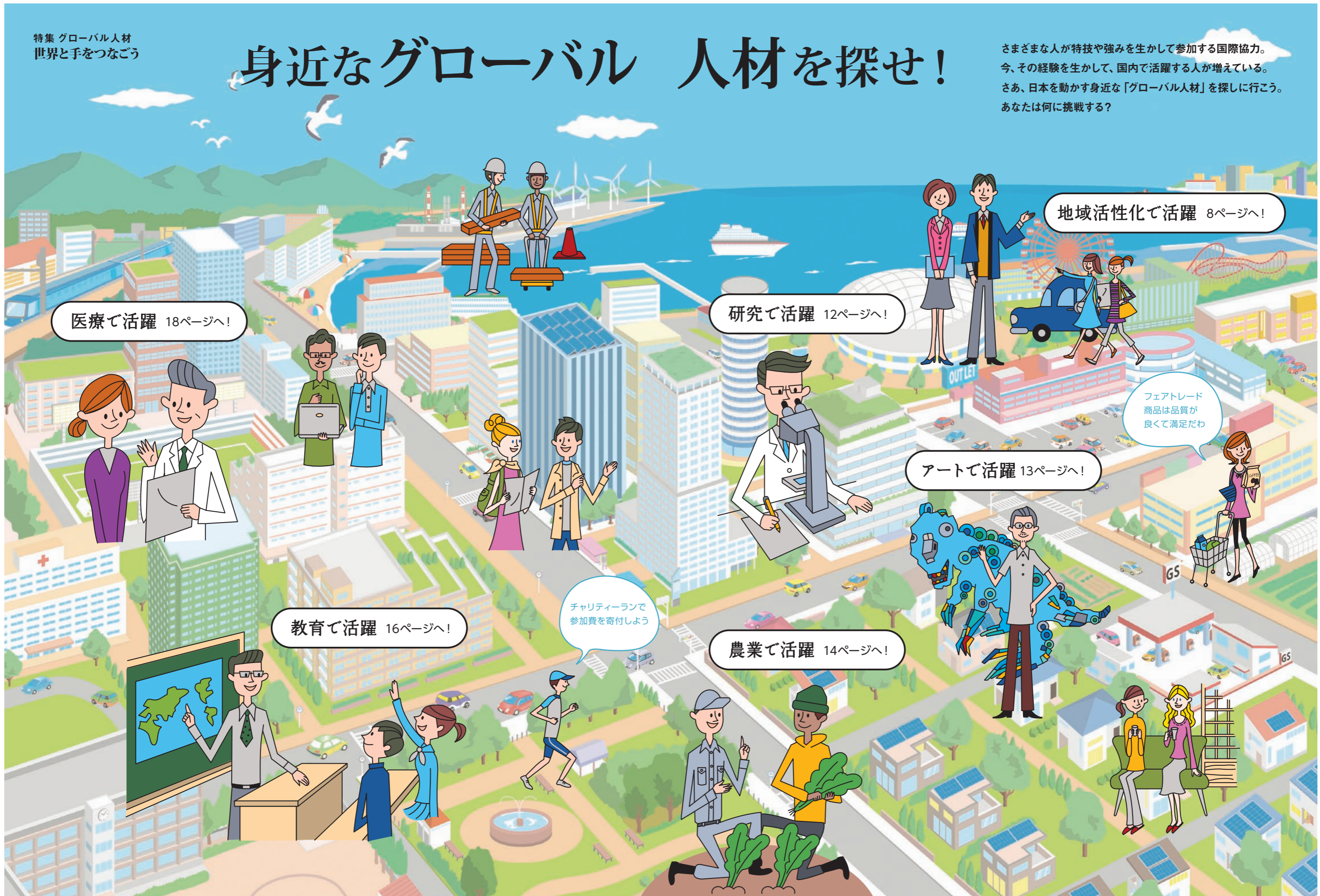
アートで活躍 13ページへ!

教育で活躍 16ページへ!

農業で活躍 14ページへ!

チャリティーランで  
参加費を寄付しよう

フェアトレード  
商品は品質が  
良くて満足だわ





他党派の議員と合同勉強会の準備。「まさに異文化」という政治活動では、先輩の議員たちから学ぶことも多い

空港の町・成田が抱える  
農村と住宅地

成田市の住宅街に住む人たちの多くは、成田空港が都心で勤務している。朝6時半、通勤客が集まってくる駅の前で、市議会議員の二期目を務める会津素子さんが活動レポートを配布していた。

「定期市議会は年4回、そのほか臨時議会があるのですが、定期

市議会の後には必ずこうやってレポートを配布しています」と会津さんは言う。

成田国際空港を抱える成田市は、もともとは御料牧場もあった農業の盛んな地域だ。「特に最近是有機農業を志す若者が増えてきています。一方で、耕作放棄地も多く、空き家問題や地産地消の推進など、課題は少なくありません。人口が増え学校を新設する地域、人

口が減り続廃合が進む地域、同じ市内でも偏りが生じているのも残念です」。農村と市街地が並立する成田市の環境と調和した町づくりが、会津さんの今の関心事だ。

会津さんは、かつて舞台俳優を目指して修行していた。ある時、ボランティアを兼ねて訪れたインドで世界観が変わる経験をした。「道端で行き倒れている人や物乞いの子どもが日常の一部となって

いることが衝撃でした。マザーテレサの「死を待つ人々の家」や関連の児童養護施設でボランティアをして、温かい食事や家が決して当たり前ではないことを初めて知ったんです。でも、現地の人たちはとても生き生きしていて、決して「かわいそう」とは思いませんでした」とそのときの経験を振り返る会津さん。海外を舞台に働きたという思いから、青年海外協力

活動レポートの配布は、定期的に行っている。中にはレポートを受け取ってくれるだけでなく、話し掛けてくれる人も

協力隊で培った解決力で  
故郷の町をしあわせに

海外を経験したことで、日本の課題に気付くとともに、故郷の良さを再確認する人も多い。故郷をより良くしようと考えたとき、できることは何か。会津素子さんは、それまで自分とは縁遠いと思っていた地方自治の道に踏み出した。



成田市議会議員  
会津 素子さん



隊への参加を目指すことにした。

とはいえ、協力隊に参加するには、特定の分野での知識や技術が必要だ。そこで会津さんは、仕事をしながら通信教育で保育士の資格を目指した。日本の児童養護施設やカンボジアの児童養護施設ボランティアなどの実地経験を積んで資格を取得し、無事、青年海外協力隊としてエジプトへ。現地ではストリートチルドレンの余暇活動を担当した。

2年間、一度も帰国せずにエジプトで子どもたちと向き合った会津さん。充実した日々だったが、乾燥した気候に「日本の緑が恋しい」と感じていたという。

だが、帰国して目にしたのは、かつて緑豊かだった里山が造成さ

れた住宅地と、疲れ切った表情の人々があふれる通勤電車、後を絶たない自殺や虐待死のニュースだった。日本社会の「命の軽さ」に漠然とした疑問を抱く中、杉並区の区議会議員を務めていた友人に誘われて地方選挙対策研修に参加し、「社会に不平不満を言うだけでなく、自分の力で変えていかなければ」と地方政治の世界に飛び込むことを決めた。

「政治は身近で楽しい  
多くの人に伝えたい」

「所属政党も資金も地元での人脈もない手作り選挙でしたが、協力隊時代のたった一人で、手元にあるもので解決する」という経験が生きたと思います。今年4

月の選挙では一期目で育った地元のネットワークを生かして無事、再選された。二期目となった現在は、地元の有権者と連携して地域社会を変えていくため、いくつものテーマを掲げて積極的に活動している。

「その一つが、空き家の活用です。成田市には多くの空き家があり、そこに住みたいと思っている若い世代もたくさんいます。空き家と若い世代をマッチングできれば、少子高齢化対策にもなると思います。8月には、その考えを実践するため、自ら5年間空き家だった市内の住宅に移り住んだ。「引っ越して気付いたのは、家は人が住まなければ傷んでいくということ。空き家を、地域の資源」と捉

えて、地域活性化に役立てたいと考えています」

現在、会津さんは有機野菜の学校給食での活用や、動物愛護センターに引き取られた犬猫の里親探し、地元農産品マーケット、里山キャンドルナイトなど、楽しみながら社会を変えていく活動に積極的に取り組んでいる。

「私自身もかつてはそうでしたが、政治を他人事、つまらないものだと思っている人は多いと思います。でも、実際はとても身近なこと、楽しいことだと知ってほしいんです」。会津さんは地元の成田市をもっと良くするために、多くの人たちが政治に関心を持つきっかけとなるような楽しい活動を続けていきたいと強調した。



地元を回って、活動報告も兼ねた聞き取り調査を行う。住民のニーズをくみ取るのも、議員の大切な役目だ

会津さんの一日

- 5:00 起床
- 6:30 駅前で活動レポート配布
- 9:00 地元野菜を扱うカフェで朝食
- 10:30 市議会に登庁
- 11:00 臨時議会に備えた議案説明会
- 12:00 他の市議と超党派勉強会の打ち合わせ
- 13:00 昼食
- 14:00 地元有権者を戸別訪問し、レポート配布やヒアリング
- 18:40 帰宅、愛犬モロと散歩
- 19:30 地元農家のホームシアターで、週末に上映会を開催するドキュメンタリー映画の試写会
- 23:00 帰宅、就寝

議員控え室で資料に目を通す



通ったカフェで情報提供をしてくれる人も



会津 素子 AIZU Motoko

1978年、東京都出身。小学生の頃、成田市に転入。役者として舞台やテレビで活躍後、一人旅とボランティアの経験を経て児童養護の道へ。保育士資格を取得し、青年海外協力隊でエジプトに派遣される。帰国後、介護施設職員を経て、2011年、成田市議会議員に当選。議員としての活動の傍ら、協力隊での経験を伝える出前授業も積極的に行っている。



ゲストハウス若葉屋  
若宮 武さん



1階の個室。若葉屋では小さな子どもを連れられたお客さんも歓迎している



自転車で大阪から旅をしている小学校教員の池内諒さん。翌日からの旅のルートは、若宮さんにアドバイスをもらいながら決めた

## セネガルで見つけた自分の生き方

青年海外協力隊としてセネガルで活動した若宮武さん。現地での経験と持ち前の行動力を生かし、帰国後は地元の高松市に「ゲストハウス若葉屋」を開業。地元と家族をこよなく愛するオーナーの素顔に迫った。



妻の裕香さん、息子の幸太郎ちゃんと。若葉屋は、古民家の建具をあしらひ、個室には畳と和紙、柱や床には四国産の木材を用いた落ち着いた和風ゲストハウスだ

協力隊に応募。2010年からセネガル地方部の村で活動を始めた。「私は、村落開発普及員」として、日々、バイクで村々を回りながら養蜂と蜂蜜の販売を支えています。セネガルは政治的に安定していることから多くの国が開発プロジェクトを実施しており、若宮さんは開発コンサルティング企業の職員に話を聞くなど、積極的に国際協力の現場を学んだ。

「私はセネガルで、どんな仕事でも全て何らかのかたちで社会の役に立っているのだと実感しました。若宮さんの赴任先の村では、苗木を売り歩く人や、他の地域から配管をつなげて村に水道を引く作業をする住民がいた。『その一つ一つは個人の『なりわい』ですが、苗木売りは森林保全、配管工は水道整備の一翼を担っているわけです。彼らは、いつ、どこで、誰に何を売るかなども自分で考えて商売をしていました』。村人の頼もしい姿に、若宮さんは感心した。

さらに、村人との活動の中で、国際協力では取り組みが小規模であるほど、外部からの支援より現地の人が自らの手で地域を良くしていく力が重要であることに気が付いた。これらの発見は、できるだけ現地の人々に近いローカルな国際協力の現場に留まることを考えていた若宮さんの将来構想に変化を与えた。

さらなる転機が滞在1年目の終わりに訪れる。「休暇中にセネガルの沖の島に旅行に行きました。そのとき泊まったゲストハウスはオーナーの自宅を兼ねた温かみある宿で、不意に『これこそ次の目標だ』と思ったんです。ゲストハウス業は、旅行者としても外国を訪れることの多かった若宮さんの海外経験を生かすことができ、自分で時間を管理しながら事業を進められる点も魅力だった。こうして若宮さんは、地元高松市でゲストハウス業を営むという新たな目標に向かって歩き始めることとなった。

満足度目指した先の地域貢献

若宮さんは、持ち前の行動力で、セネガルにいたうちからインターネットで高松市にある工務店の情報を調べ、簿記の勉強も始めた。任期を終えて帰国すると、すぐに地元のホテルに就職。夜勤でフロント業を学ぶ傍ら、日中は開業準備を進めた。こうした努力の末、帰国の翌年には、和風の「ゲストハウス若葉屋」がオープンした。

「お客さんとおしゃべりをしながら、お客さんの好みや予算、その日の天気も考慮に入れ、一人一人に合わせた旅先の提案をしています。だからこそ、『2泊目は若葉屋ではなくて、瀬戸内海の島で泊まってみてはどうですか』と提案することもあるという。

宿泊客の満足度を最優先する若葉屋は、実は若宮さん自身の満足度を追求した宿でもあった。1歳になる息子の父親でもある若宮さんは、家族との生活を第一に考え、自宅併設型のゲストハウスにこだわった。接客の合間に息子をお風呂に入れることも日常茶飯事だ。セネガルの村人のように、何より家庭を大事にしたい。今、思い描いていた生活が実現している。

国内外から多くの人が集まる若葉屋は、高松市の観光交流課からも職員が視察に訪れるなど、町づくりを担う重要な観光アクターとして、期待を寄せられている。高松市は、各方面で活躍している地元の若い世代を交えて町づくりを検討する「高松市創造都市推進懇談会」を主催しており、若宮さんはその委員も務めている。

「グローバル人材というと、海外に出て行く人を連想しがちですが、外から来た人を内側で受け止める人間も必要ですよ。それはゲストハウス業を始める前は、気付かなかったことだった。『ゲストハウス業という私の『なりわい』が、結果として大好きな地元の振興や人々の交流促進につながればうれしいです』。そう語る若宮さんは「今が幸せです」と付け加えてほほ笑んだ。

「子どものころから、海外には強い関心がありました。そう語る若宮さんは、中学生のとき、英語教師の提案がきっかけでガーナに住む同年代の子と国際文通を始めた。大学時代には、その友達を訪ねてガーナまで行ったという。若宮さんにとって初めての開発途上国は、『友達に住む国』だった。

将来は開発援助に携わる仕事に就きたいと希望していたことから、大学院進学も考えていたが、悩んだ末、まずは民間企業で社会人経験を積むことを決めた。

商社の営業職として3年間勤務した後、会社を退職して青年海外

### 国際協力の現場で見つけた目標



ドミトリーに宿泊していたデンマーク人のアナ・マツセンさん。四国八十八カ所を巡るお遍路が旅の目的だという

### 若宮さんの一日



若宮 武 WAKAMIYA Takashi  
大阪外国語大学(現、大阪大学)開発環境専攻。民間企業に3年間勤務した後、青年海外協力隊としてセネガルで活動。帰国後、地元香川県の高松市で「ゲストハウス若葉屋」を開業。業務を学び、高松市で「ゲストハウス若葉屋」を開業。

特集 グローバル人材  
世界と手をつなごう



『海亀』(2002年)  
家庭から排出される  
ペットボトルを集めて、  
カメのオブジェを作った

『さよなら蛙達』(1993年)  
世界の食糧問題に対する  
思いから、お米で作ったカ  
エルを展示した



『かえっこ』(2000年～)  
子どもたちが使わなくなった  
おもちゃを持ち寄って交換を  
するイベント。現在でも全国  
各地で開催され続けている

藤さんの違和感から生まれた作品やプロジェクト



アート  
で  
活躍

新しい発想で  
アートの概念を変える



未知の価値観との出会い

美術家として数々の作品を生み出す傍ら、アートを通じた多様なプロジェクトを手掛ける藤浩志さんの活動のルーツは、20代のときに青年海外協力隊として派遣されたパプアニューギニアにあった。きっかけは、偶然目にした協力隊の説明会のポスターだ。「初めは国際協力に関心があったわけではなく、西の文化が入り、国の価値観が変化していた日本の明治時代に興味があり、開発途上国

に行けば、同じような時代にタイムスリップできるのではないかと、いう期待があったのです。」

隊員時代は、美術大学を卒業した強みを生かして、パプアニューギニア唯一の国立芸術学校で美術を教えた。同国では小中学校で美術の授業はないため、ほとんどの生徒が絵を描いたことすらなかった。「人物をモデルにした彫刻を作る授業の中で、紙に下書きを描かせようとしたのですが、生徒たちは一向に描こうとしません。理由を尋ねると、紙に人の大きさが入

るわけがないと言っているのです。そのとき、人や物を「記号化」して描く概念がないことに気づきました。」他にも、色を表す言葉が少ない

など、ことごとく日本と違う価値観に驚きの連続だったが、その経験こそが宝物だと藤さんは話す。「全く新しい視点を持つことができた。逆にそれまでの自分の価値観が特殊なものに感じることもありました。そこから、日本社会に対するさまざまな違和感を抱くようになったのです。」

アートの地域を元気に

帰国後は、こうした違和感が作品づくりのヒントになった。その一つが、家庭から排出されたベッ

トボトルを集めて制作したオブジェだ。「隊員時代に、パンの袋の口を留めるプラスチック素材を学生がアクセサリーとして耳に付けたら、みんながまねし始めたということがありました。この経験から、日本でもビニールやプラスチックが大量に捨てられていることに違和感を抱き、廃品を使った作品づくりを始めたのです。」

もう一つ、藤さんが協力隊の経験から学んだことは、地域とつながりを持つことの大切さだ。「現地の人は、身近な素材を使ってカヌーを作ったり、地域にある顔料でポスターペインティングをしたりしていました。その姿に心を動かされ、地域資源や適正技術を生かしたアートを目指すようになりました。」地域の中に創造的活動の拠点を作ろうと考え、全国各地を回って、アートを通じたワークショップや、まちづくりプロジェクトを手掛けるようになった。また、十和田市現代美術館の館長も務め、美術館が大学や自治体と連携しながら地域研究を行う仕組みを確立させようとして取り組んでいる。

「世界のどこに新しい時代を切り開く価値観が潜んでいるか分かりません。私にとってパプアニューギニアでの経験は、自分の視野と感性を大きく広げてくれました」と語る藤さん。今後も面白い「仕掛け」を生み出してくれそうだ。



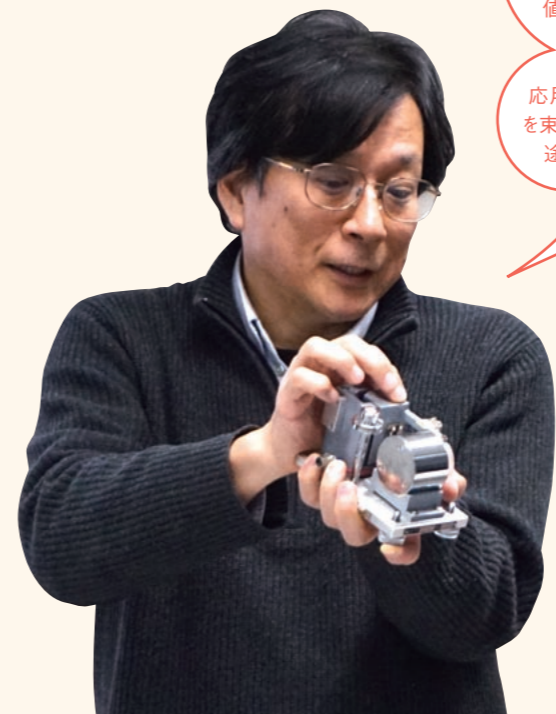
日本で研修を受けたエルサルバドルの研修員に対し、さらに現地でも耐震工学の補完研修を行った(横井さん:前列中央)

「最近では、明確な意志と使命感を持って国際協力に参加する若い人が多いようですが、私が青年海外協力隊に参加したころは、むしろそうではない人の方が多かったような気がします」。国立研究開発法人建築研究所国際地震工学センターのセンター長を務める横井俊明さんは、1986年に青年海外協力隊に参加した当時のことをこう振り返る。

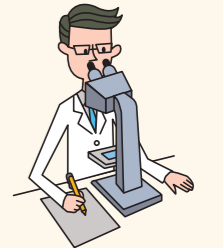
「あの頃の私は、日常に対して漠然と閉塞感を抱いていました」と話す横井さんは、大学院時代に専攻していた「地球物理学」が青年海外協力隊の募集職種にあることを知り、当時務めていた民間企業を退職してコロンビアへ飛んだ。派遣先は、コロンビアのカリ市にある「カウカ河自治開発公社」。

「海外の人々と接する上で大切なのは、文化的背景が異なる相手との向き合い方です。国・地域ごとに異なる文化や習慣、好みなどを、発展や近代化の度合いの差だと思いつままないよう気を付けることが大事です」と横井さんは指摘する。それは、地域性の強い応用地震学を専門とし、各国から研修員を受け入れながら、自らも多くの国に足を運んでいるからこそ分かる、国際協力の心構えだ。

国際地震工学センターで、開発途上国向けの国際地震工学研修事業を担当する今の自分は、まさに青年海外協力隊の延長線上にいます。私が専門とする応用地震学では、強い揺れの発生原理とその観測技術、影響の予測を、土木工事的な現場での作業から数値シミュレーションまでさまざまな手法を使って研究します。また、地域性が強い課題を扱うので、「think globally, act locally」の実践が大事になる点が魅力です。私たちは、応用地震学分野での研究と耐震設計、津波防災分野を束ねた研修事業によって、日本と同じリスクを抱える開発途上国の地震・津波防災対策に協力しています。



国立研究開発法人建築研究所  
国際地震工学センター センター長  
横井 俊明さん YOKOI Toshiaki  
京都府生まれ。大学院で地球物理学を専攻し、民間企業勤務を経て1986年から青年海外協力隊(コロンビア共和国:地球物理学)に参加。現在は、(研)建築研究所国際地震工学センターのセンター長を務める。



研究  
で  
活躍

日本と世界の  
地震防災を支える

同社がスイスの技術支援の下で進めていた地震観測所の設立に、日本人として携わるといふ特殊な立場での参加だった。関連機関の間の調整が取れおらず戸惑うことも多かったが、持ち前の楽観的な姿勢と専門技術を生かしながら協力した。

3年間の任期を終え帰国した横井さんは、大学や研究所などの勤務を経て、現在は、応用地震学の専門家として建築研究所に勤務している。同研究所は、地震学や耐震工学に関するODA事業も手掛ける組織で、横井さんは開発途上国の対応部署である国際地震工学センターのセンター長として、国際地震工学研修事業の企画運営などの指揮を執りながら、海外研修員向けの講義などを担当している。

「海外の人々と接する上で大切なのは、文化的背景が異なる相手との向き合い方です。国・地域ごとに異なる文化や習慣、好みなどを、発展や近代化の度合いの差だと思いつままないよう気を付けることが大事です」と横井さんは指摘する。それは、地域性の強い応用地震学を専門とし、各国から研修員を受け入れながら、自らも多くの国に足を運んでいるからこそ分かる、国際協力の心構えだ。



隊員時代の経験を生かして、ドミニカ共和国やエルサルバドルで有機農法の普及や環境プロジェクトの企画などに携わった後、佐々木さんはついに宮崎で農業の夢を実現させた。現在取り組んでいるのは、作物の栽培と鶏の飼育を組み合わせた「有畜複合農業」だ。

### たどり着いた農業の形

美しい田園風景が広がる宮崎県都城市。10年前、佐々木正吾さんは夫婦でここに移り住み、以来、農業を営んでいる。「道路地図を片手に、農業ができそうな場所を求めて九州各地を回りました。宮崎には縁もゆかりもありませんが、地元の人たちは温かく迎え入れてくれました」。知らない土地で農業の道を進むことを決断した佐々木さん。その転機は25歳の時に訪れた。佐々木さんは、大学で環境保全について学んだ経験を生かして、河川や工場排水などの環境分析をずっとやりたいと考えていた有機肥料の普及にも取り組んだ。「コストリカでは有機肥料はほとんど使われていませんでした。そこで、まずは実際にやってみて成功事例を作ろうと考えていたとき、一緒にチャレンジしたいという農家の仲間が出てきてくれたのです」。土が肥沃になり、作物が健康に育つ有機肥料の良さを伝えながら、地元の人たちと一緒に取り組んだ結果、化学肥料を使わずにキャベツやレタスなどの野菜を収穫できたほか、無農薬栽培にも成功した。これは当時の同国では画期的なことであり、地元のテレビや新聞にも取り上げられるなど多くの反響を呼んだ。「実は、私は有機肥料を作った経験も有機栽培の経験もありませんでしたが、頭の中の知識とやりたいという願望だけで挑戦しました。佐々木さんはこのとき、農家の喜びを肌で感じ、いつか自分自身でも農業をやろうと心に決めた。

「この研修は日本でのプログラムの後、コスタリカでも開催されますが、その講師を務める現地の農民グループは、私の隊員時代の仲間たちなんです。あれから30年近くがたった今、中南米地域の農家を支援するため、私たちはそれぞれ別の国で同じ研修に参加しています。これほどうれしいことはありません」。日本から遠く離れた地での出会いは、今も佐々木さんの心の支えになっている。

農園で収穫された野菜や穀物の残りはかすは鶏の餌に、鶏のふんは畑の肥料として活用する循環型の農業で、廃棄物などの無駄が少ないため、環境に優しい。もちろん野菜は化学肥料や農薬は一切使っていない有機栽培、鶏は薬剤や輸入飼料を使わずに放し飼いだ。今では毎年、途上国からの研修員を農園に受け入れていて、発酵飼料の作り方や有畜複合農業の仕組みについて教えている。「隊員時代に、ノウハウの普及には農家から農家に直接伝えていくことが、一番影響力があると実感しました。そしてようやく、私もその農家の一人になれた気がします」と笑顔で語る佐々木さん。世界のどここの国の小規模農家でも実践可能な形として期待される有畜複合農業が、研修を通じて途上国の国々にも広がっていくことを願っているという。

### 悩んだ末の一大決心

美しい田園風景が広がる宮崎県都城市。10年前、佐々木正吾さんは夫婦でここに移り住み、以来、農業を営んでいる。「道路地図を片手に、農業ができそうな場所を求めて九州各地を回りました。宮崎には縁もゆかりもありませんが、地元の人たちは温かく迎え入れてくれました」。知らない土地で農業の道を進むことを決断した佐々木さん。その転機は25歳の時に訪れた。佐々木さんは、大学で環境保全について学んだ経験を生かして、河川や工場排水などの環境分析を

行う仕事に就いた。ところが、働き始めて数年がたったころ、学生時代から興味があった農業への思いが再び強くなり、本当にこのままいいのかと考えるようになった。そんなとき、頭に浮かんだのが青年海外協力隊だった。「会社を辞めるのは大きな覚悟が必要でしたが、自分がやりたいことは、農業と環境の接点」を生み出す仕事だと気付き、新しい世界に踏み出すことを決めました。派遣先は中米のコスタリカ。ここで、農協の職員に対して畑の土壌分析や肥料設計の手法を指導した。さらにもう一つの活動として、



**おいしい昼食**  
昼食は妻の和枝さんの手作り。農園の野菜、米、卵、鶏肉をふんだんに使った料理が振る舞われた



**続いて、飼料作りの工程を見学**

米、小麦、大豆などのさまざまな国産材料を配合して手作りしている。独自の方法で発酵させたこだわりの餌を使うことで鶏が健康に育つほか、生育が不十分な農作物も活用でき、無駄をなくすことができるという



**午後からは公民館で講義を実施**

佐々木さん自身のこれまでの経験や、有畜複合農業の仕組みなどが紹介され、現地の実情を踏まえた真剣なディスカッションが行われた。研修員たちは口々に「ぜひ母国でも伝えていきたい」と話していた



**1日に約150個生産される自慢の自然卵**

「農業と鶏の飼育を組み合わせることで、安定した収入が得られ、消費者の健康づくりにも貢献できます」と佐々木さん

**佐々木 正吾 SASAKI Shogo**  
北海道生まれ。帯広畜産大学で畜産環境学を専攻。卒業後、環境計量証明事業を行う民間企業に就職し、1988年から青年海外協力隊としてコスタリカに派遣。その後、JICA専門家などを経て、2005年から宮崎県で農業を営む。現在、JICA研修員を農園に受け入れ、有機栽培と自然養鶏の組み合わせによる有畜複合農業に関する知識や技術を伝えている。

### 「しょうご農園」の研修に密着！

今年6月から8月にかけて、JICA筑波は、途上国の小規模農家の生産性向上や、環境保全の推進などを目的とした研修コースを開催した。中南米諸国から16人の研修員が参加し、埼玉、鹿児島、宮崎の農村地域などを視察した。その視察先の一つが、佐々木さんが経営する「しょうご農園」だ。研修が行われた一日に密着した。



**まずは有機栽培を行っている野菜畑を見学**

佐々木さんは、これまでの経験を生かして、全てスペイン語で説明を行う



農業  
で活躍

農家として  
開発途上国のために  
できること

宮崎県で農園を営む佐々木正吾さんが取り組んでいるのは、作物や土が持つ力を最大限に生かした、人にも環境にも優しい農業だ。そのノウハウは海をまたぎ、途上国の人たちにも伝えられている。



「しょうご農園」代表  
佐々木 正吾さん

## 高校からの経験生かし 国際協力の現場へ

青年海外協力隊研修生  
池田 愉歌さん



バングラデシュ派遣に向けて研修に取り組む

大槻先生がWITHを立ち上げる際のメンバーの一人だった池田さん。当時からボランティア活動に興味があり、大槻先生を誘って路上生活者の夜回りボランティアに参加したこともあるという。2年生のときに大槻先生のゼミに参加して教材の作成からワークショップの運営までの一連の工程を経験。JICA関西のイベントや、協力隊経験者が集まる場所でのワークショップを通して、国際協力や開発教育などについて深く学んだ。

また、テレビで放送された国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 職員の活動に衝撃を受け、よりいっそう国際協力への道に魅力を感じるようになった。大学ではNPOのスタディーツアーや卒業論文のための現地調査を経験し、途上で仕事をするために青年海外協力隊への参加を決めたという。大学で学んだ現地調査の知識を生かして、バングラデシュの地下水の汚染が深刻な地域で、「安全な水」に関するワークショップや啓発活動に取り組む予定だ。

「私にとって、国際協力とは、課題を抱える地域の人々が、それぞれの可能性を伸ばす活動です。現地の人たちと共に活動することで、自分自身も学び、成長できると考えています」という池田さん。2年間という限られた任期の中で住民の「安全な水へのアクセス」を少しでも可能にするために、今から思いをめぐらせている。

可能な地球のためのゼミ」として開発問題を学ぶゼミを担当した。同クラブの生徒が中心となってゼミナーや講演会に参加し、独自の「国際理解ゲーム」を作成して出張授業を行うなど、楽しみながら開発問題を学んだ。

高校での活動を通して、大学で学びたいことを見つけた生徒や、NPO活動に参加している生徒なども多い。世界を知ると同時に、社会での道しるべを見つめる役にも立っているようだ。

「これだ」と考えた大槻先生は、協力隊OBの仲間たちと一緒に「国際理解研究会みなみの風」を立ち上げ、以来、ずっと研究を続けている。ゲーム感覚の教材や授業案を考案し、学校の授業や自治体のセミナーでの講師なども行っているという。

「衣服や日用品、食料など、私たちの生活はいや応なしに世界とつながっています。私たちは世界を取り巻く諸問題と無関係ではないどころか、そうした問題は意外と身近なところで起こっているんです」と強調する大槻先生。これまで歴任してきたどの学校の生徒も、開発教育には興味を示してくれたと強調する。勇気を持って世界に一步を踏み出せば、何かが変わる――。自らの経験で感じたそのことを、生徒や他の先生たちと一緒に伝えていくつもりだ。



環境教育に興味を持つ若者は多い。自分たちの生活とのつながりは、国際理解への糸口



合同学習会で、生徒自身が調べた内容を発表。こうした経験が、生徒たちの将来につながる

大槻先生は、自分の協力隊参加を振り返って「実のところ、参加するときはそこまで大きな目的を持ってはいなかったんです」と言う。理科教師の大槻先生はネパールに派遣され、1年目は山間の小中高一貫校で理科教育を受け持ち、2年目は政府機関で理科のカリキュラムや教科書の作成を担当した。「日本の子どもは勉強と言くとノットに書き始めますが、ネパールの子どもは教科書を読み始めます。そういうところがそれぞれの得意分野につながっていくのだろうと感じました」

帰国後、自分の経験を日本社会に還元する方法を考えているうちに、開発をめぐるさまざまな課題を考える。開発教育に出会った。

「これだ」と考えた大槻先生は、協力隊OBの仲間たちと一緒に「国際理解研究会みなみの風」を立ち上げ、以来、ずっと研究を続けている。ゲーム感覚の教材や授業案を考案し、学校の授業や自治体のセミナーでの講師なども行っているという。

大槻先生は8年前、堀川高校に異動してすぐのころ、授業の中でレアメタルを取り上げる機会があった。その時、「レアメタルをめぐって、アフリカで内戦が起きてい

る」と話したことをきっかけに、もっとこうした話が知りたいという生徒たちが集まってきた。そこで、後のユネスコクラブとなる「ワールドスタディWITH」というクラブを立ち上げた。

また、担当教師が得意分野のゼミを開く「総合探究」では、「持続

**大槻一彦 OTSUKI Kazuhiko**  
青年海外協力隊としてネパールの学校に派遣され、国際理解と開発教育の大切さに気付く。日本に帰ってから協力隊OBと研究会を立ち上げ、開発教育に取り組み続けている。

## 世界との出会いを 日本に還元するために

京都市立堀川高等学校  
大槻 一彦先生



開発教育全国研究集会で、世界を日本の若者に伝えるため、開発教育は大槻先生(中央)のライフワークになった

## 日本社会で世界を教えたい

世界を見てきた経験を、どうやって日本に伝え、生かしていくか。授業では知ることのできない風景を生徒たちに届けるため、大槻一彦先生は、課外活動や研究活動に取り組んでいる。



**柔道整復師**とは、どんな職業かご存知ですか。接骨院や整骨院で施術をしたり、スポーツトレーナー、あるいは介護などの分野でも機能訓練指導員として活躍できる国家資格です。柔道整復術は日本の伝統療法で、骨・関節・筋などに関わる損傷を「手」と「身近にある物」を使って正常の状態に治す点が特徴です。

私は、1997年に神戸市で接骨院を開業し、患者さんに施術を行っているほか、スポーツ選手やお年寄りの健康指導もしています。

2006年からは、モンゴルでの柔道整復術の指導にも携わっています。活動のきっかけは、柔道整復師の施術を受けていたモンゴル出身の力士が「母国にも柔道整復術を広めたい」と発言したことでした。こうして、外務省や在モンゴル日本国大使館、現地唯一の国立医療科学大学、そして私の所属する日本柔道整復師会が協力して、視察などを行い、2009年からJICAの草の根技術協力事業による活動が始まりました。

これまで30回以上モンゴルを訪問していますが、協力が始まった当初は自分も現地で指導を行うようになるとは思っていませんでした。とは言え、このような活動の計画があることは知っていましたので、声が掛かったときは、二つ返事で参加を決めました。

モンゴルでは、地方を回って医師に対する指導を行ったり、首都のウランバートルで市民対象の公開セミナーや、地方医師を目指す学生向けの講義を行っています。特別な医療



モンゴル地方部の医師に骨折時の固定法を指導する根来さん

器具を必要とせず、例えば針金など、身の回りにある物を使って処置できる柔道整復術は、開発途上国で受け入れられやすく、地域の現状に即した協力が実現しています。技術を学ぶ学生たちは勉強熱心で、今後、現地で柔道整復術の普及を中心となって支える人材が育っています。

2011年3月11日に東日本大震災が発生したとき、私はちょうどモンゴルから帰国したところで、空港にいました。地震発生から数日後には被災地を視察し、被害状況を把握した上で、5月に南三陸町で施術を行いました。避難所で生活されていた方々は、生活の疲れから体の不調を訴えていました。

このような国内での災害時の対応やモンゴルでの技術指導などの際は、長ければ1カ月程度、現地に滞在することもあります。神戸で一緒に接骨院を運営している弟や家族の理解・協力の下、国内外で柔道整復師として活動に従事できることを誇りに思います。

**小** 学生の時に、アフリカの大地をバイクで走る青年海外協力隊の看護師をテレビで見たんです。その姿が凛として格好良く、それ以来、青年海外協力隊として開発途上国で活動することが夢となり、看護師の道に進みました。

実際に応募したのは日本で7年間働いた後でした。私の専門は脳外科で、看護師5年目からは救命救急センターに勤務し、医療の前線での人命を救う仕事にやりがいを感じていました。それでも、休職でなく、退職して青年海外協力隊に参加したのは、派遣期間中に価値観に大きな変化が生まれるかもしれないと思ったからです。

2011年、晴れて青年海外協力隊となった私の派遣先はセネガル東南部のクンベントゥーム県保健センターでした。同県では村落の衛生状況が悪く、村の有力者に働き掛けながら住民の健康意識向上を目指す啓発活動などを行いました。

現地では、医療従事者が患者を見下す傾向があるという問題がありました。これは、大勢の患者さん一人一人に、じっくり向き合うことが難しい日本の病院の現状にも通じることです。その一方、セネガルの村では若い男性が近所のお年寄りを世話する姿などが当たり前に見られました。そんな光景を見て、「医療従事者と患者」ではなく、「人と人の助け合い」こそ、私が理想とする地域の在り方だと気付いたのです。

こうして、医療が必要な人の自宅に看護

師が出向く「訪問看護」という新たな夢を見つけた私は、帰国から4カ月後にケアマネジャーの資格を取り、もともと訪問介護事業を行っていた株式会社スマイライフに、昨年、新たに訪問看護事業部を立ち上げました。社員の協力の下、渋谷区にあるオフィスを拠点に、3キロ圏内の約50軒の家を自転車やバイクで訪問しています。

私が「家」にこだわったのは、患者さんの「その人らしさ」を大事にしたかったからです。人の生活の一部として医療を提供するようになった今、人間味あふれる仕事に以前よりも深いやりがいを感じています。

長期的な目標は「町づくり」です。子ども、お年寄り、学生、社会人などそこに住む全ての人が、コミュニティーの中で互いに助け合いながら安心して暮らせる昭和の日本のような温かい町をつくりたいと思います。



セネガルで、助産師と共に妊娠・出産の経過、また、病気の経過について住民に啓発を行う小松さん

**長** 野県は全国でも「長寿県」として知られています。中でも佐久市は、「全ての市民が健やかで生きがいある人生を全うできること」を目指して「地域医療」に積極的に取り組んできました。地域医療とは、病院などの医療機関が中心となって住民の健康増進を支えたり、疾病予防に取り組むものです。その実践には、住民が主体的に健康づくりに参加することや、行政機関との連携が欠かせません。

私は、大学でそんな地域医療を学んでいましたが、世界で見聞を広げたいと思い、モンゴルやインドネシアなど開発途上国でのボランティアに参加したことをきっかけに、徐々に国際保健にも関心を持つようになりました。そして、HIV/エイズの現状を確かめるために訪れたウガンダで、エイズ孤児が差別を受け、教育の機会を奪われている現実を知り、将来、国際保健分野で貢献することを決意しました。

佐久総合病院で研修医として地域医療を学んで小児科医となった後、2012年から、ザンビアで「HIVモバイルクリニック」の活動にJICAの専門家として協力しました。これは、郡の病院から医師が出張診療することで、医療機関や医師が不足している地方部でもHIV/エイズ感染者の定期的な治療を目指す国家プログラムで、私はそのマネジメント支援などに携わりました。

ザンビアでは、政府主導で治療体制が強化された一方、差別から病院に行くことをた



ザンビアの「HIVモバイルクリニック」の活動で、ヘルスセンターの看護師や助産師に母子感染予防策の指導を行う加藤さん

めらい、亡くなる患者さんもいました。こうした現状を知り、予防や啓発の必要性を強く感じました。

地域のニーズや信頼関係を大事にする地域医療の考え方は、こうした場面で生かすことのできる日本の知見です。そんな思いから、地域医療の考え方に代表される佐久市の保健医療福祉がどのように発展してきたのかも一度学び直し、ミャンマーなどでの海外事業に協力する中で、開発途上国の人々に伝えています。

今後も、国内で小児科医として診療を行いつつ、地域のニーズに即した保健医療の在り方を世界に発信していきたいと思



公益社団法人 日本柔道整復師会  
国際部長

NEGORO Shinya

根来 信也さん

A. **どこに行っても、現地の人々と共に課題を考え、困難を乗り越えながら与えられた役割を全うできる人。機会があるならば迷わず協力しよう！**

株式会社スマイライフ 取締役  
代々木上原事業所 所長 看護師

KOMATSU Minori

小松 美紀さん



A. **「普通の人」でしようね。大切なのは人間力。語学力やコミュニケーション能力など特別なスキルは必ずしも必要ではないと思います。**

Q. グローバル人材とは…

医療で活躍  
地域に寄り添い  
人々の健康を守る



医療で活躍



A. **グローバルな価値観に基づき、世界の課題に取り組める人。さまざまな価値観を理解するには、まず日本をよく知ることが肝心！**



長野厚生連佐久総合病院  
国際保健医療科/小児科 医長代理

KATO Takuma

加藤 琢真さん

## おいしいものを食べて世界の子どもに給食を //



### [TABLE FOR TWO]

2007年に日本から始まったTABLE FOR TWOは、「世界の人口70億人のうち、10億人

が貧困にあえぐ一方で、20億人が食べ過ぎている」という不均衡の解消を目指している。協賛するレストランやカフェ、社員食堂、学食などで参加メニューを1食選ぶごとに、アフリカやアジアの国の給食1食分が寄付される。これまでに集まった支援は3,400万食分を超え、現在は世界14カ国で展開されている。

食堂の枠を超えてスーパーやコンビニなどにも広がっており、西友では今年4月からカロリー低めのお総菜を買って寄付ができる「カロリーオフセットプログラム」を開始して好評だ。

また、毎年10月16日の国連世界食料デーにあわせて、「100万人のいただきます!」キャンペーンを開催している。2015年のテーマは「おに

ぎり」。おにぎりを食べる写真を投稿する特設サイトのほか、さまざまな企業が協賛キャンペーンを展開する。

「自分のための健康な食事や運動が、世界の子どもたちに食事として届くのが特長です」と話す、TABLE FOR TWOの大宮千絵さん。思い立ったら、今日の食事を世界と分け合うことから始めてみよう。



日本での食事を、給食としてアフリカやアジアの子どもたちと分け合う

TABLE FOR TWO HP: <http://jp.tablefor2.org/index.html>  
「100万人のいただきます!」キャンペーンサイト: <http://jp.tablefor2.org/campaign/onigiri/>

## 走ってつなげる子ども支援の輪 //



### [PARACUP ~世界の子どもたちに贈るRUN~]

ホノルルマラソンに参加して走る楽しみを知った仲間が、ファンドレイジングの一環として2005

年に始めた大会。今では約20団体の共催で、5,000人以上が集まる一大イベントになった。代表理事の森村ゆきさんは、「誰かのために走ることを、世界に目を向けるきっかけにしてほしい」と語る。

当日はハーフマラソンから子ども向けのキッズランや親子ランまで、幅広い種目が開催されるほか、リラクゼーションやフード、共催団体の活動紹介ブースを設置するなど、ちょっとしたお祭りの雰囲気だ。運営ボランティアとしての参加も可能で、ランナーとボランティアに分かれて参加する家族もいる。

「自分の小さな楽しみが、人の役に立つと感じてもらえたら」という森村さん。この大会で支援

するフィリピンの孤児院からは、毎年、参加賞の手作り首飾りが届く。「子どもたちには多くの人自分たちを応援していることを、ランナーには困難な状況で頑張っている子どもたちがいることを知ってほしい」という。支援が10年を超え、この大会からの支援で大学に入学する人も出てきた。小さな一歩も、積み重ねれば大きな輪になる。



ランナーと運営ボランティアと一緒に大会を作る。参加賞は支援先の手作りだ

PARACUP 2016 (2016年4月)の参加者は11月ごろから募集開始。  
詳しい情報はHP (<http://www.paracup.info/>)、Facebookページ (<https://www.facebook.com/PARACUP>)などを参照。

## 身に着けるものだから人に優しい宝石を //



### [エシカルジュエリー EARTHRISE]

「例えば、ダイヤモンド以外の全ての宝石が取れるスリランカ。鉱山では児童労働こそ禁止さ

れています。安全への配慮が不足していて、坑道の事故でけがをしたり、亡くなったりする人が後を絶ちません」。EARTHRISE代表取締役の小幡星子さんは、宝石や貴金属の採掘を取り巻く厳しい状況を、そう話す。

現状を変えるために始めた同社は、労働者の安全を考えてきちんと給与を払う鉱山主と直接契約し、宝石を仕入れている。台座となる金などの貴金属も、労働者への適切な給与に加え、採掘や精錬で環境を汚染していないことが保障された、フェアマインド(適正な採掘)認証のものを使っている。

祖母がずっと身に着けていた形見の指輪を母から受け取ったとき、ジュエリーにはその人の

人生が宿ると感じたという小幡さん。「目の前にあるものがどうやって作られたのか、考えてみてほしい」と言う。

普段使いのアクセサリーのほか、国内の熟練職人が作るブライダル用のオーダーメイドジュエリーも人気だ。常に身に着ける大切なものだからこそ、生産国の人を思う気持ちを込めて選んでみては。



産出国の職人の労働環境を尊重し、より品質の高いジュエリーに

EARTHRISE 表参道本店 東京都渋谷区神宮前4-3-18 1F  
営業時間: 金曜日~月曜日12:00~19:30 HP: <http://www.earthrise-j.com/index.html>



## フェアトレードタウンをつくろう! //

### 特集 グローバル人材 世界と手をつなごう

グローバルの力が生活につながる場所身近にもたくさんある。日常に関わる国際協力の糸口をご紹介します。

# 毎日の生活が世界とつながる!



世界は遠い。つながるなんて難しい。そう思っている人もいるかもしれない。でも、あなたの住む町そのものが、世界とつながっているとしたら?

フェアトレードタウンは、開発途上国の人たちを支援したいと思う個人だけでなく、企業や商店、大学、学校、行政などが一体となって、まちぐるみでフェアトレード(FT)を推進する都市のことだ。2000年にイギリスで始まったこの活動は、現在ではロンドンやパリ、ローマなどを含む世界23カ国、1,700都市に広がっている。日本では2011年に熊本市が最初の認定を受け、今年9月19日には名古屋市が国内二番目のフェアトレードタウンとなった。

フェアトレードタウンの条件には、市内でフェアトレードの認知度が高く、FT商品を扱うショップの数が増えていることなどのほか、地域の経済・社会活動や障がい者支援などの連携がある。途上国の人たちと適切な価格で取引するだけでなく、地域の産業やコミュニティを活性化することも求められているのだ。

フェアトレードタウンなごや推進委員会の原田さとみ代表は、「長年にわたる草の根のフェアトレード推進活動に加えて、生物多様性条約

第10回締約国会議(COP10)などが開催されたことで、名古屋でのフェアトレードの認知度は4割近くまで上がっていました。今年3月10日に名古屋市議会がフェアトレード支持の議決を満場一致で採択したことで、ようやく認定の条件が整いました。認定を得たこれからは、町の在り方や地元の商店・産業と向き合う新たな始まりです」と語る。

名古屋でのFT活動は「地域と世界、今と未来をつなぐ“地球とのフェアトレード”」を大きなテーマとしている。これは世界のフェアトレードタウン運動の主流になりつつあるビッグテント・アプローチを反映したもので、大きなテントのように、さまざまな方面で活動する団体や組織が連携し、フェアトレードの多彩な在り方を幅広く取り込んで相乗効果をもたらすのが狙いだ。原田さんは「フェアトレードタウンになったことを契機に、名古屋と世界のつながりを見つめ直すだけでなく、地域の絆を深め、FT活動を通じた国内・国外との交流の促進や、町の賑わい創出につなげたい」と強調する。町と世界とのつながりは、町の中での人と人のつながりを見直す機会にもなりそうだ。



フェアトレードの認知が高まることと、地域社会のつながりが深まること。フェアトレードタウンには、その両方が必要だ

## 自分が暮らす 地域 で学びたい! という人には …

### JICA国内拠点

全国15カ所にあるJICAの国内拠点では、「地域と途上国との結節点」として、市民、NGO、自治体、学校、民間企業などと連携を進め、地域の人々が世界に目を向ける機会を提供。グローバルな視点を持つ人たちが、全国各地から生まれている。

高校生が世界を体感! (高校生国際協力実体験プログラム from JICA九州)



**J**ICA九州では、高校生に国際協力について理解を深めてもらうため、夏休みを利用した2泊3日の参加型プログラムを実施している。アフリカ地域からの研修員との交流会では、各国の食事情について高校生がインタビューに挑戦。「文化の違いに驚くことがたくさんあった」「コミュニケーションを取る難しさと楽しさを学んだ」と多くの刺激を受けていた。また、元青年海外協力隊員から実際の活動の話や、途上国でも信頼関係が大切であることを実感している様子だった。

## さらに深く 世界 で学びたい! という人には …

### 大学生国際協力 フィールド・スタディ・プログラム

JICAが行うこのプログラムは、大学生が途上国でのミニ・フィールド調査演習を通して、グローバルな視点と問題発見・解決能力を身に付けることを支援する制度だ。毎年、長期休暇の期間を利用して、学生を途上国に派遣している。

村田 望さん

2013年度参加(ラオス)

**大**学時代、国際協力に関心はありながらも具体的なイメージを持てずにいたとき、掲示板でこのプログラムを知り、現場を知れるまたとない機会だと思って応募しました。ラオスで事業を展開している日本の製菓企業を視察した際、社会貢献活動として、現地の人材の雇用促進、周辺の学校や橋などの整備、さらには不発弾の除去も行っていることを知り、新しい国際協力の形を見ることができました。この経験を生かしたいと思い、帰国後は開発コンサルティング企業に就職しました。将来的には海外で水資源分野の業務に関わりたくです。



現地住民にアンケート調査を行った(後列左から2人目が村田さん)

江崎 那留穂さん

2013年度参加(ラオス)

**教**育開発に関心があり、以前、ネパールの孤児院でボランティアを行いました。短期間の滞在では本質的な問題やニーズを把握することはできませんでした。そこで、途上国の課題を深く理解するため、このプログラムに参加しました。最も感銘を受けたのは、ラオスの学校に本の配布などを行う日本のNGOの活動です。「本を読むことで自分の世界を広げてほしい」という代表の方の言葉が印象的で、多様な国際協力があることを改めて実感しました。今は大学院で、プログラムで学んだ調査手法を生かし、ネパールの修学実態の研究に励んでいます。



現地の学校を訪問。生徒たちの熱烈的な歓迎を受けた

世界を舞台に働きたい! 国際協力を携わりたい! でも何から始めればいいのか分からない。それなら、まずは世界の現状を知ることから始めてみてはどうだろう。楽しみながら世界を学ぶことができるさまざまなプログラムを紹介しよう。

知ろう! 学ぼう!



世界のしくみ

## JICA地球ひろば 徹底解剖!

「市民参加による国際協力の拠点」として2006年に設立されたJICA地球ひろばは、展示やイベントなどを通じた学びの場や、市民団体の情報発信や交流の場として活用されている。ここに来れば、あなたに合った「国際協力」がきっと見つかるはず。

### 体験ゾーン

世界が直面する課題や日本の取り組みを体験型の展示で紹介。基本展示では、「貧困」「保健・医療」「教育」「子ども」「紛争」「水」「相互依存」の7つの体験ゾーンがあり、来場者は探検シートに書かれたクイズに挑戦しながら学びを深めることができる。

※9月15日から来年1月10日までは、基本展示に替わり、協力隊発足50周年に合わせた企画展示「世界に笑顔を広げよう! ボランティアで国際協力」を開催。



途上国の子どもたちが普段運んでいる水と同じ重さのバケツ。持ってみると「重い!」と思わずびっくり



火薬や信管を抜いた実物の地雷が展示されている。恐る恐る手にする子どもと、それを見つめる人たちの表情にも緊張が走る



マラリアを予防するための蚊帳を体験。「蚊帳に使われている糸には殺虫剤が練り込まれていて、徐々に表面に出てくる構造になっています」と案内人の女性が説明

### 交流ゾーン

セミナールームや会議場では、年間を通じて国際協力に関するイベントやセミナーを開催。アジアやアフリカをテーマに工作に挑戦する企画や、世界遺産について学ぶセミナー、途上国を舞台に製作された映画の上映など、子どもから大人まで幅広い世代を対象にしたプログラムが用意されている。また、国際協力に関わる市民団体の情報発信や交流の場として、会議室の貸し出しも行っている。



大学生・若手社会人向けイベント「気軽にトークCAFE」

### J's Cafe

施設内にある食堂「J's Cafe」では、さまざまな途上国の郷土料理を提供している。メニューは日替わりで、展示と連動した期間限定メニューも登場する。また、途上国で生産されたフェアトレード商品も販売されている。



「サンコーチョ・コン・アロス」from ドミニカ共和国  
鶏肉、カボチャ、サトイモなどを煮込んだスープ。パーティーなどで振舞われる

### 地球案内人

地球ひろばを案内してくれるのは、「地球案内人」と呼ばれるガイドたち。それぞれが、青年海外協力隊など国際協力の経験者で、体験ゾーンでは展示について詳しく説明してくれる。



国際協力やボランティアに関するさまざまな相談も受け付けている

### 団体訪問者からの声

自分たちが日常的にしていることができない国が多いことを知り、びっくりした。  
(大垣市立江並中学校)

同年代の子どもたちが日々懸命に生きているのを知り、一日一日を大切にしたいと思った。  
(沼田ユネスコ協会)

将来どんな職業に就くか悩んでいたが、協力隊の活動を知り選択肢が広がった。  
(駿河台大学)

### 日本人々の国際協力参加を後押ししたい

大学卒業後、民間企業に就職した桑江直人さん。イギリス留学を経てJICAに転職を決めたのは、国際協力への強い思いがあったからだ。JICAにおける国内外での勤務経験を生かし、日本の人々に国際協力を伝える仕事に奮闘している。

#### 民間企業から 国際協力畑にチャレンジ

私は、大学で経済学部を専攻し、卒業後は教育関連企業の営業職として4年間働きました。教材の販売などを通じて教育に携わることになりがいを感じていましたが、30歳を目前に控え、「このままで良いのだろうか」と考え始めました。そこで、以前から関心のあった国際協力の分野にチャレンジしてみようと思い、イギリスの大学院に留学して開発学を学びました。

帰国後、2004年にJICAに入構しました。国内事業部での研修業務担当、アジア第一部でのカンボジア担当などのほか、フィリピン事務所での在外勤務も経験しました。フィリピンでは、貧困削減班長として、主に上下水道分野のプロジェクトに携わりました。そこでは、国際協力のプロジェクトが実際にどのように形作られ、運営されているのかを学ぶとともに、一つのプロジェクトが実に多くの人々の協力に支えられて成り立っていることを実感しました。その中で、JICA職員として、関係者を結び付けながら効果的にプロジェクトを推進していく仕事の醍醐味を味わいました。

現在は、九州国際センターの市民参加協力課で九州圏内を対象に、ボランティア事業の取りまとめ、開発教育支援業務の取りまとめ、広報の3つを主に担当しています。

3つの業務に共通しているのは、できるだけ多くの人に知ってもらい、参加してもらうことが重要だということ。しかし、これを実際に成果に結び付けるのは簡単なことではありません。他の地域同様、九州圏内でも近年、ボランティアの応募者が減少傾向にあります。また、開発教育は、実施件数自体は伸びていますが、現場である学校のニーズに合わせ、さらに、グローバルに活躍する人材の育成につなげていくためには、まだまだ改善が必要です。

そうした中で、私が意識しているのは、「顧客目線」を大切にすることです。JICAは民間企業ではありませんが、相手あつての仕事ですから、私たちの企画を活用する側の視点に立つて業務に取り組むことを心掛けています。また、どの業務も関係者が多いため、関係者の利害を調整しつつ、物事をスムーズに進めていくマネジメントスキルも重要です。

#### 自らの体験を基に 国際協力を伝える

市民参加協力課での業務は、出前講座やセンター訪問など、学生の前で話す機会が比較的多いことが特徴です。JICAの事業や世界の現状を知ってもらうことで、これからの将来を担う学生に対し、働き掛けられることにやりがいを感じています。私自身も学生時代、最初は海外と言えは先進



JICA九州国際センター  
市民参加協力課  
**桑江 直人**  
KUWAE Naoto

大学卒業後、教育系民間企業に4年間勤務。イギリスの大学院で開発学の修士号を取得した後、2004年にJICA入構。11年12月より現職。



教師海外研修の帰国後研修の様子

国のイメージが強かったのですが、偶然見た難民の映像がきっかけで、だんだんと視野が広がり、開発途上国により関心を持つようになりました。JICAを知ってもらうことで、少しでも多くの学生たちが同じように、幅広く世界に目を向けてくれたらと思います。

今後は、もし出向などの機会があれば、積極的に手を挙げたいと思っています。海外に出ると、それまでとは違った視点で自分の国を見られるようになることがありますよね。それと同じように、他の組織からJICAを見ることで幅広い見識を身に付け、その経験を基に、若い世代に国際協力について伝えていけるようにしたいと思います。



フィリピンの地方水道改善プロジェクトの終了時評価のため、近隣住民にインタビューを行う桑江さん(写真中央)

## ミンダナオで平和に向けた支援継続を表明 01



小学校教室引き渡し式に出席した田中理事長

田中明彦理事長は、8月23日から26日にかけてフィリピンを訪問し、ベニグノ・アキノ3世大統領と会談を行うとともに、ミンダナオ島で実施中のJICA事業の引き渡し式に出席しました。

26日の会談では、前日に借款契約の調印に至った「マニラ首都圏主要橋梁耐震補強事業」と「ダバオ市バイパス建設事業（南・中央区間）」の協力について、アキノ大統領が謝辞を述べました。これらは、日本の技術を活用した「質の高いインフラ」の整備支援として期待されています。

これに先立つ24日、田中理事長はミンダナオ島マギンダナオ州北ウピ町を訪問し、パンサモ口移行委員会（モハガー・イクバル議長と共に「パンサモ口包括的能力向上プロジェクト」で支援した小学校の教室引き渡し式に出席しました。

この事業は、昨年3月のフィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線（MILF）による包括和平合



アキノ大統領と会談する田中理事長（左）  
© Malacañang Photo bureau

意文書の署名後、ミンダナオ紛争影響地域の20カ所に小学校や公民館施設を建設する支援の一環として実施されたものです。引き渡し式で田中理事長は、JICAはコミュニティの人々に着実に届く支援を目指してきたことや、今後も人々に寄り添いながらミンダナオの平和定着のために協力を続けていくことを述べました。

さらに、25日にはMILFのムラド・イブラヒム議長、26日にはムスリム・ミンダナオ自治政府のムジブ・ハタマン知事と会談し、和平定着に向けた課題や今後の支援の在り方について意見交換を行いました。

JICAは包括和平合意前から、ミンダナオ国際監視団の社会経済開発部門に職員を派遣し、和平後を見据えた人材育成などにも取り組んできました。今後も将来の行政官育成や中長期的な地域開発計画作りなど、ミンダナオの支援を強化していきます。

## アンゴラ初の円借款契約に調印 02



署名後に握手を交わす田中理事長（左）とアルマンド・マヌエル財務大臣

JICAは8月17日、アンゴラ共和国政府との間で「電力セクター改革支援プログラム」を対象として、236億4000万円を限度とする、同国初の円借款貸付契約に調印しました。

アンゴラでは、2002年の内戦終了以降、復興と開発が進み、現在では、ナイジェリア、南アフリカに次ぐアフリカ第三の経済規模を有する成長市場として注目を集めています。しかし、電化率は約30%で、企業活動などへの影響も深刻化しています。

「電力セクター改革支援プログラム」は、電力分野を重点の一つとし、外国投資拡大に向けた制度改善などにも取り組む同国政府の開発計画を後押しするもの。JICAはアフリカ開発銀行と協調し、①電力セクターの効率性・競争性・持続性の改善、②電力セクターにおける民間投資の促進、③公共財政の透明性と効率性の向上、④ジェンダー主流化と環境配慮の促進、⑤投資環境の改善のための政策・制度改革を通して同国の持続的发展に貢献します。

## 「世界の笑顔のために」プログラム 物品募集中! 03



モルディブに届けられた野球用具

「私はもう使わないけど、まだ使える」。そんな物品があったら、「世界の笑顔のために」プログラムに参加してみませんか。

教育、福祉、日本文化、スポーツなどの分野で、開発途上国が必要としている物品を日本国内で募集し、JICAボランティアを通じて現地の人々に届けるこのプログラム。個人はもちろん、学級活動の一環や、企業、地域で集めるなど、参加の形はさまざまです。

鍵盤ハーモニカや書道用具など、あなたの身近にあるものが国際協力の一歩になります。たくさんのご応募をお待ちしています。

【参加申込書受付期間】10月1日（木）～11月16日（月）

【問い合わせ】青年海外協力隊事務局「世界の笑顔のために」プログラム係

【TEL】03・5226・9196

【URL】<http://www.jica.go.jp/partner/smile/>

# 地元力育てる暮らしを

ヨシオカ農園代表 吉岡 龍一

## 本当の豊かさ考え「日本」を見つめる

近年、新規就農者はとて少なく、農家はほとんど減っています。ですが、農村は日本の美しい原風景であり、生産者にとっても消費者にとっても暮らしを支える大事な場所です。

地域の農家と一緒に農地を守り、人と人を結び付けながら、地域・社会を盛り上げる動きにしていきたい。そんな思いで2012年に地元の千葉県柏市で始めた農業がきっかけとなり、今では飲食店の経営や、利用者がスペースを共有しながら独立した仕事を行うコワーキングスペースの運営も行っています。これらは分野の異なる事業ですが、いずれもその根底には、地域の人々が集い、交流する場を演出することで、地元の活性化につなげたいという思いがあります。

実は、私は大学4年次の冬まで、政治思想を勉強するために大学院に行くつもりでいました。卒業間近になって進学を辞め、農家への道を進むこ

とを決めたのには、大学時代に参加した二つのNPOでの経験が影響しています。

大学3年次には「地球の友と歩む会」という環境系NPOの活動を手伝っており、その一環で南インドの農村を訪れました。村では、テレビなどの電化製品を持たない家庭が多く、現地の人々は「日本はすごい」と言っており、日本の暮らしをうらやましました。しかし、現地の子ども達の輝く笑顔や人々の幸せそうな様子を見るうちに、「今の日本の暮らしはそれほど誇れるものだろうか」と疑問に思うようになりました。日本を見つめ直す仕事がしたいと考えようになったのはその時からです。

大学4年次には「アサザ基金」というNPO法人に、1年間インターンとして参加し、茨城県の中学校で環境教育に携わりました。使われなくなった学校近所の田んぼを耕して生徒たちと一緒にもち米を作り、収穫したもち米は、障害者の雇用に熱心な地域の企業と協力してせんべいに加工し、商品として販売しました。

このような活動の企画運営に携わる中で、次は

ヨシオカ農園に農業体験に来る参加者は若い世代が多い



自分で地元の柏市のためにプロジェクトを起こしたいと思うようになりました。そこで考えたのが、「物を作って世に出す」ということ。人が五感で感じることで物を使って、地域の人々に直接動き掛けたいと考え、農業にたどり着きました。

2012年から柏市が主催する1年間の就業プログラムに参加して、地域の農家で研修を受け、現在は、市の旧沼南町エリアにある鷺野谷という小さな集落で、「ヨシオカ農園」を営んでいます。

ヨシオカ農園では、CSA (Community Supported Agriculture) (じまり、地域で育む農業) という考え方を大切にしています。周辺の農家と協力し合うだけでなく、地元の消費者にも農業に関心を持ってもらい、みんなで農業を盛り上げていきたいと考え、農作業体験を受け入れられているのです。農作業体験では、畑の除草作業や収穫を体験してもらっただけでなく、夜には畑で採れた野菜を使ってバーベキューもします。希望者は多く、平日は会社勤めの人や、週末の一時を自然の中で過ごすといった、心のゆとりを求めてやってくる人も少なくないようです。



フロッシュでお客様と談笑する吉岡さん(写真左)。「フロッシュ」はドイツ語でカエル。店長を「変える」、お客様が店に「帰る」の意味合いが込められている



コワーキングスペースのNOBでワークショップに参加する利用者たち

6P(ヨルカフェフロッシュ)は、地元の友人2人と共同で立ち上げたレストランで、ヨシオカ農園の野菜を使った料理を提供しています。「交流」と「発信」をコンセプトとするこの店は、曜日限定店長が売りのコミュニティカフェバーで、曜日ごとに店長を募集し、「飲食店をやってみたいけれど、今の仕事を辞めるなど生活を大きく変え

な活動として形になっていくのだと思います。

個人で仕事をするお客さんたちとの出会いは、新たな事業のアイデアにもつながりました。2013年から、さまざまな人々が集い、業種の壁を超えてコミュニケーションしながらノウハウを共有し、新しいアイデアを生み出す場として、「Noblesse Oblige (NOB・ノブレス・オブリージュ)」というコワーキングスペースを運営しています。

この分野で事業を行うのは初めてだったので、当初は利用者との契約の結び方などルールやシステム作りが苦戦しましたが、利用者のニーズを取り入れながら、快適なコワーキングスペースづくりを目指しています。

都市近郊の柏市では、生活の場と職場が別々である職住分離型の暮らしが一般的ですが、地域を拠点とする新しい働き方を提案することで、NOBが「職」を通じて地元の活性化を実現する創造的な場になればと願っています。

これまで、「農業」という自分の直感を信じて突き進んできたことで、地域に内在する「地元力」を引き出す活動が少しずつ広がってきました。仕事や家庭など、いろいろな制約はあるかもしれませんが、もし挑戦できる状況にあるならば、ぜひ自分を信じて新しいことを始めてほしいと思います。

## 地元力引き出すコミュニティー創造

同じく2012年から始めた「YOL Cafe Pro-

<Profile>

よしおか・りゅういち

1988年、千葉県松戸市出身。日本大学在学中にNPO法人アサザ基金で1年間環境保全を学ぶ。卒業後、地元の千葉県柏市で営農開始。また、EDGE HAUS.llcのメンバーとして、「顔の見える、おかげさまサイズの地元」をコンセプトに柏市で街づくりも行う。



### Q3. 自分がどんな国際機関に向いているかわかりません。

A3.

国連事務局を中心に、さまざまな国際機関の人事担当者が「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」として毎年来日し、日本の皆さんに国際機関での具体的な仕事について説明を行っています。その場で採用活動を行うわけではありませんが、人事担当者に直接話を聞くことのできる、貴重な機会です。今年は10月中旬に予定されています。

国際機関で働く人の職種は多彩で、自分には関

係ないと思っている皆さんにも可能性はあります。自分の専門性を高めるとともに、国際社会の常識をしっかりと身に付け、英語をはじめとする外国語で議論したり書類を書いたりできるようになることが重要です。普段から英語圏のニュース雑誌を読むなどの習慣付けや、世界の裏側の出来事を自分との関わりで捉えられる広い視野を持つように意識してみてください。

### Q1. どうすれば国際機関で働けるの？

A1.

国連などの国際機関では、職務内容や地位など決まったポストごとに各機関が「空席公告」を出して職員を募集しています。この公告は各機関のホームページなどに掲載されていて、興味のあるポストがあれば各自で必要書類を送付することになります。

国際機関の人事選考では、自分がこれまでどんな仕事をしてきて、どのような能力や適性を持ち、それを生かしてどれだけこの仕事で貢献できるかを問わ

れますので、普段から英語で自分の能力を相手に伝える準備が必要です。

国際機関は数が多く、全ての空席公告をチェックするのは大変です。そこで国際機関人事センターでは、2週間ごとに主要50機関の空席公告をまとめてホームページの「最新の空席情報」に掲載しています。あらゆる分野の空席公告を横断的にチェックできるので、ぜひ活用してください。

### Topic from Abroad



マッサージ研修中の講師や視覚障がい者の方々に聞き取り調査を行う石田さん

### 障がい者の社会参加の促進に向けて

フィリピンの首都マニラにある国立職業リハビリセンターで、視覚障がい者の方々に聞き取り調査をしている認定特定非営利法人アイキャンの石田由香理さん。一見ごく普通の調査風景に見えますが、よく見ると手には点字端末が。実は、石田さんは1歳3カ月のときに両眼を摘出し、全盲なのです。

障がいを抱えながら海外の大学院に進学した石田さんは、学生時代にスタディーツアーで訪れたフィリピンで、ありのままの自分を受け入れてくれる優しい現地の人々に魅力を感じた一方、現地では障がいがある人は十分な教育を受けられず、何もできないと思われる状況に驚き、障がい者に対する教育に興味を持ったそうです。

障がいが原因で貧困に陥り、希望が持てなくなっている人に希望を持ってもらいたいと強く願い、現在、障がい者の生活環境を向上させる開発プロジェクトの専門家となることを目指して、外務省のNGOインターン・プログラム※を活用し、障がい者の社会参加を促進するためのプロジェクトの計画立案に関わる活動を行っています。障がいをばねにして自分にできることを見つけ、情熱を持って仕事に取り組む石田さん。今後の活躍に期待しています。

※日本の国際協力NGOへ就職を希望する若手人材に門戸を広げると同時に、若手人材の育成を通じて日本のNGOによる国際協力を拡充するため、外務省がインターンの受け入れと育成を日本の国際協力NGOに委託し、育成にかかる一定の経費を支援する事業。

### Q2. 決まったポストに応募する 以外の方法は？

A2.

日本は国の規模や国連への分担金・拠出金の額に対して、国際機関職員の数が大幅に少ないことが課題です。そこで、政府が国際機関と協力して、ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー (JPO) 制度を実施しています。

これは、国際機関で働きたい若者を日本政府が各国際機関に派遣して、現場で2年間の経験を積んでもらい、その後の正規採用を目指すものです。毎年300人程度が応募し、この制度で30~40人が派遣されています。

JPOへの応募資格は、35歳以下で大学院修士号以上の学位を持っていること(取得見込み可)、英語で仕事ができること、そして2年以上の職務経験があることです。国際機関の業務に関するNGOや会計、法務などから、青年海外協力隊での開発協力に至るまで、何らかの分野で専門性を持って仕事をしてきた人を求めています。将来にわたって国際機関で働きたいという強い意志も欠かせません。

世界食糧計画 (WFP) のJPO参加者とアブドゥラ事務局長 (左から4番目)。左端の藤原和幸さんは現在、WFPガーナ事務所で働いている



**POINT**

- 1 国際機関への就職は、空席ポストに直接応募するのが基本
- 2 日本政府が若手を国際機関に派遣するJPO制度も
- 3 「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」は各機関の人事担当者から話を聞くチャンス

### テーマ グローバル人材

外務省 総合外交政策局  
国際機関人事センター室長

**阿部 智**

ABE Satoshi

1983年外務省入省、88年から外務省無償資金協力課。世界各地の大使館、領事館などを経て2007年から日本貿易振興機構 (JETRO) 農林水産部主査、11年から在パプアニューギニア大使館参事官を歴任。14年7月から現職。



**ココシリ**

「ここが知りたい」。国際協力に関する政策を外務省の担当者が分かりやすく解説します!

## 地の塩を食む人々

キャンプ地を夜明け前に出発して、  
塩の採掘場に向かうキャラバン。  
酷暑の地ゆえ、涼しいうちに採掘  
を終えなければならない

- c. 遊牧キャンプの主のような立派な牡牛と、その周りに無邪気に集う子どもたち
- d. 入れ墨と鋭利に削った前歯が、アフール族女性の風習
- e. テント内の家族。アフール族は戦闘的なことで知られ、男たちは自動小銃を常に持ち歩いている



d



c



a



e



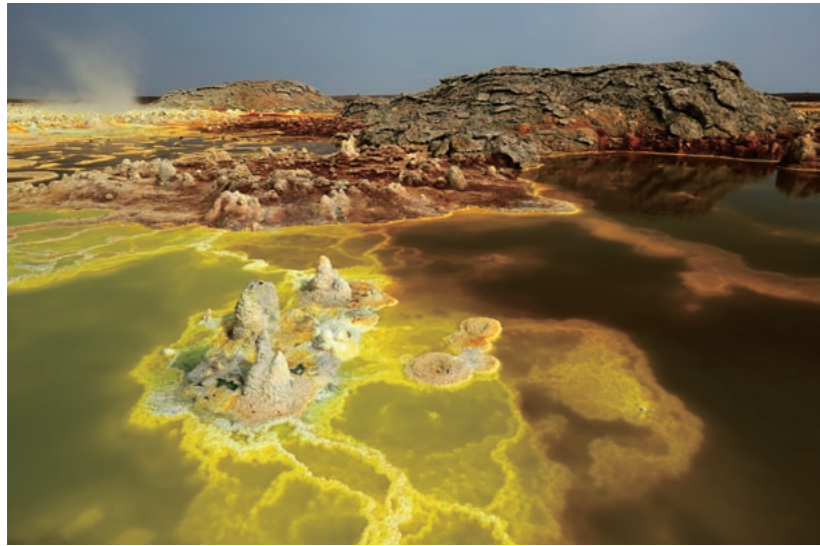
b

エチオピア東北部、エリトリアからジブチ、ソマリアにかけて、紅海に沿ってダナキル砂漠が広がっている。その地形から、アフール三角地帯とも呼ばれている。遊牧の民アフール族のテリトリーでもあるからだ。一帯はアフリカ大地溝帯の中でも地殻活動の痕跡が最も顕著に現れた地域で、海面下120メートル、塩の平原が広がる北部のダロル低地などは、紅海の海底の隆起により生じたものだ。

果てしなく広がる塩の地平と、黒々と地面を覆い尽くしたむき出しの溶岩からなるダナキル砂漠は、真夏には摂氏50度を超す熱気が張りつめ、地上最悪の砂漠と呼ばれてきた。隣接するエチオピア高原は平均標高が2300メートルあり、年間を通じて摂氏20度前後で、緑に覆われた冷涼な農作地帯が広がっている。そこから標高差2000メートルもの急坂をいっきよに下って、熱気に覆われた塩と溶岩むきだし土地に突入していき、噴き出す汗にあえぎながら感じる違和感は、体験した者でなくては理解できない。

高原の気候に慣れたエチオピア人たちは、ダナキルは人間の住むところじゃない、と首を振る。アフールの人々は家畜の遊牧と塩の交易で暮らしている。不毛のダナキル砂漠の中でも、エチオピア高原から流れ下ってきたアワシユ川流域だけは例外的に牧草に恵まれている。一帯では綿花栽培の大規模な灌漑農園が開発されており、綿花を摘み取った後の農園ではおびただしい数の家畜が放牧されている。

a. 綿花を摘み取った後の農場にキャンプする遊牧民家族。枝の骨組みを箆で覆ったアフール族独特のテント  
b. 早朝、山羊の乳搾りをする。遊牧民の彼らにとって、家畜は生業の重要な柱だ



h



f

アフアール族は他部族に対して閉鎖的、戦闘的なことで知られている。倒した敵の性を切り取って求婚の際に花嫁に贈るといふ凄まじい風習を過去に持っていたことから、「キン狩り族」の異名で恐れられてきた。私がエチオピアに頻繁に通っていた1980年代から90年代はじめにかけて、軍政下で民族対立が激しかった時代、ダロル低地をはじめとする、ダナキル砂漠の大半の地域への外国人の立ち入りは禁じられていた。

塩のキャラバンが活動するダロル低地を私が訪れたのは、2012年1月のことである。この地域には宿泊施設はまったくないため、ガソリンとキャンプ用品を満載したもう1台のランドクルーザーと2台で行動しなくてはならない。そして、警護のために、武装した警官3人が途中の町から乗り込んできた。

海面下120メートルに広がる塩の原野を、エチオピア高原を目指すラクダキャラバンが行く。その数およそ400頭、強烈な西日を受けながらしばらく進むと、前方地平線にもう一隊のキャラバンが現れ、砂煙を上げながらこちらに向かってくる。翌日に塩を運ぶための空荷のキャラバンである。ラクダを連ねたキャラバンが、今の時代に、これほどのスケールで営まれていることに圧倒される思いだった。



f. 掘り出した塩の板を積み込み、キャラバンはエチオピア高原を目指す。かの地では塩が取れないため、高値で売れるのだ  
g. 干上がった塩湖表面を覆った塩の板を掘り起こす男たち。盆地の上、地表からマグマが近いこの地の暑さは世界一過酷で、作業は秋から冬にかけてしかできない  
h. 海面下90メートルにあるダロル・クレーター。地下のマグマ溜まりからミネラル分が噴出している

野町 和嘉 (のまち かずよし)  
1946年高知県生まれ。1972年サハラ砂漠への旅をきっかけにアフリカの乾燥地帯の取材をはじめ、アラビア半島、チベット、アンデスなどを長期取材。

断食



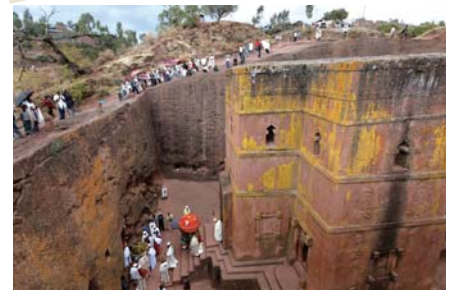
断食中の食事は厳格な菜食。豆は重要な食材だ

アフリカ最古の独立国として、独自の文化を守り続けているエチオピア。主な宗教はイスラム教とキリスト教だが、東方キリスト教会の一つで、かつて国教だったエチオピア正教会は独自の典礼を持っている。その一つが断食だ。エチオピアには8種類の断食期間があり、毎週水曜日と金曜日のように1日だけのものから、長いものでは2カ月近くにわたる。合計すると1年のうち、一般の信者で180日間、聖職者に至っては250日間も断食の期間があるという。一方、復活祭後の7週間はごちそうが続き、水・金曜日の断食も免除となる。

断食中は、肉はもちろん、卵や乳製品、バターなど、動物由来の食材は一切口にしないだけでなく、触れたり、匂いを嗅ぐことも避ける。魚は許されているが、内陸の山岳国なのでそもそも手に入りにくい。断食中の食事は一日一食で、昼の礼拝が終わった午後3時過ぎに食べることが多い。

新約聖書マタイ伝には、キリストが「人はパ

ンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と言って悪魔の誘惑を退ける場面がある。エチオピアの人々の生活には、キリストのこの言葉が今も息づいているようだ。



エチオピア正教の聖地ラリベラは世界遺産にもなっている

写真：野町和嘉

参考：鈴木秀夫「高地民族の国エチオピア」(古今書院・1969)、KNUTSSON and SELINUS "Fasting in Ethiopia - An Anthropological and Nutritional Study" (The American Journal Of Clinical Nutrition, Vol. 23, No. 7, p956-969)

地球ギャラリー

エチオピアの文化を知ろう!

アトゥケルトウワット(野菜のシチュー)は、おもてなしから断食中まで、幅広い場面で親しまれるエチオピアの家庭料理だ。ディアフリクの店長ヨナスさんも、幼いころ、よくお母さんに作ってもらったという。断食のとき以外は肉料理や魚の揚げ物などと一緒に食べるが、それらと比べて油っこくないので、「これを食べると健康になった気がします」とヨナスさんは笑った。

エチオピアでは一般的に、酸味の効いたクレープ状の主食、インジェラと一緒に食べるが、パンやごはんにもよく合う。ピリッとした刺激の後に、野菜その

ものの甘みが広がり、なんとも癖になる味わいだ。

インジェラを食べる際は、一口大にちぎり、具を挟んで、お互いの口に運んで食べさせ合うのが、エチオピアでの作法だという。

ディアフリクでは、他にも美容と健康に良いさまざまなアフリカ料理を提供している。日本ではなかなか食べられないインジェラも食べることができる(二人前以上、5日前までに要予約)。

エチオピア料理といえば  
断食中でも食べられる健康的なシチュー

アトゥケルトウワット



【RECIPE】

●材料(4人前)

タマネギ 1個/ニンジン 3個/ジャガイモ 3個/キャベツ半分/ニンニク、ショウガ各 1 かけ/ターメリック 1つまみ/青トウガラシ少々(好みで調整)/塩コショウ少々

- 1 ニンジン、ジャガイモを5cmくらいのくし形に切り、素揚げしておく。
- 2 縦に薄切りにしたタマネギ、ショウガ、ニンニクを、色付くまで炒める。
- 3 ②にターメリック、青トウガラシを加えて火を通した後、ざく切りにしたキャベツを加え、しっかり火を通す。
- 4 キャベツがしんなりするまで炒めたら、火を消して①と混ぜ合わせる。
- 5 最後に塩コショウで味を調えたら出来上がり。

【SHOP INFORMATION】



de' Afrique (ディアフリク)

〒158-0083  
東京都世田谷区奥沢6-33-14  
もみの木ビル2F  
営業時間: 18:00~4:00(日曜定休)  
電話番号: 03-6432-1914  
HP: <http://www.de-afrique.jimdo.com>

# 新着情報

# イチオシ!

## M OVIE

### 『ベトナムの風に吹かれて』

ベトナム・ハノイで日本語教師として働くみさおは、父の訃報を機に、日本に一人残された認知症の母をベトナムに呼ぶことを決意する。日本から出たことのない母はさまざまなハプニングを巻き起こすが、次第に現地の人々と心を通わせていく。みさおも、老いた母と初めて向き合い、自分自身の人生をより豊かなものにしていく。実際にハノイで日本語教師を務める女性の体験を基に、歴史、戦争、介護など、今の日本が問われているテーマを扱っている本作。第二の人生を歩もうとする人々に向けた“大人の青春映画”だ。



©「ベトナムの風に吹かれて」製作委員会

2015年/日本・ベトナム/1時間54分

監督: 大森一樹

出演: 松坂慶子、草村礼子他

公開: 10月17日(土)より有楽町スバル座ほか全国公開

URL: [www.vietnamnokaze.com/](http://www.vietnamnokaze.com/)

配給: アルゴ・ピクチャーズ

## B OOK

### 『日本人ビジネスマン、 アフリカで蚊帳を売る』

かつて、日本も苦しんだ伝染病「マラリア」。マラリアを媒介する蚊から人々を守るため、防虫剤を練り込んだ糸で織った蚊帳を考案した日本人の研究者がいた。本書は、画期的な商品を開発しながらも、すぐには市場に受け入れられず、日本人とケニアの関係者が力を合わせて現地での販売実現に奮闘する姿を描いたノンフィクション。日本企業のアフリカ進出を成功へと導く鍵が隠されている。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

浅枝敏行 著  
東洋経済新報社  
1,944円(税込)

## E VENT

### 『第10回 UNHCR難民映画祭』

今年で10回目を迎える「UNHCR難民映画祭」。今年は東京と札幌に、新たに仙台を加えた3都市で開催される。スーダンの内戦によって孤児となった若者の姿を描いた「グッド・ライ〜いちばん優しい嘘〜」、難民としてイランで幼少期を過ごした少女がプロボクサーを目指す「ボクシング・フォー・フリーダム」など、幅広いテーマの作品が上映される。また、監督や俳優などのゲストの登壇やトークイベントも予定されており、世界の難民の現状について理解を深めることができる。



© UNHCR

会期: 10月2日(金)~11月1日(日)

会場: (東京) スパイラルホール、イタリア文化会館、  
(札幌) 札幌市時計台ホール、札幌プラザ2・5、  
(仙台) せんだいメディアアーク

URL: [www.unhcr.refugeefilm.org/2015/](http://www.unhcr.refugeefilm.org/2015/)

問: 国連難民高等弁務官 (UNHCR) 駐日事務所

TEL: 03-3499-2011

## B OOK

### 『世界で一番美しい海のいきもの図鑑』

海の中には、私たちがまだ知らないユニークな生き物が数多く存在する。本書は、潜水歴40年、世界80カ国以上を旅してきた写真家が出会った海洋生物の写真375点が収録されている。思わず息をのんでしまうような美しい色をした魚や、この世のものとは思えない不思議な姿をしたプランクトンなど、生命の神秘や一瞬の輝きを捉えた写真とともに、生態にまつわる興味深いエピソードも多数紹介。ページをめくり、知られざる海の世界を旅してみよう。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

吉野雄輔 著  
創元社  
3,888円(税込)

「7月号特集「感染症」を読んで」

■地球ギャラリ「ゴチャック〜祈りの旅路〜」を読んで、チベットの人たちの、並々ならぬ信仰心の強さを感じました。あそこまでやるのか、という思いです。特集「感染症 国境のない戦い」にも感銘を受けました。最近韓国でのマーズコロナウイルスの問題もあり、世界的な態勢で立ち向かうべきだと考えます。

(北海道／60代／男性)

■感染症のことは、どこか他人事のように考えていました。医療大国・日本にいれば、分らない病はないと思っていたからです。しかし、JOYさんの記事を読んで、誰にでも起こり得る身近なものだと実感しました。私自身、また、家族・友人にとつても他人事ではない感染症の現状を伝えたいと思いました。

(茨城県／20代／女性)

「8月号特集「森林保全」を読んで」

■戦争は何一つ益を生み出しません。今回のVoiceに掲載されていた、子どもたちの手から武器をなくす南スーダンの動き。当たり前のことが、多くの国でまだまだ未解決のままです。世界平和のために全ての国が声を上げ、行動を起こす必要を痛感しています。

(愛知県／60代／女性)

■私は毎週末にキャンプに行くほどキャンプ好き。いや、キャンプというより自然が好きなのです。何もせずに木々の音を聞いていると、全てを忘れることができます。私にも何かできるかと思わせる号でした。

(北海道／40代／女性)

## 本誌へのご意見・ご感想や JICAへのご質問を お寄せください。

プレゼント  
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2015年11月15日

Eメール：jica@idj.co.jp

FAX：03-3221-5584(『mundi』編集部宛)

- ① テレビ塔ハンカチ
- ② 書籍『日本人ビジネスマン、アフリカで蚊帳を売る』(p37参照)
- ③ 書籍『世界で一番美しい海のいきもの図鑑』(p37参照)



①



②



③

本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

### 申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形で送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送を手配いたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)

住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F

TEL 03-3221-5583

FAX 03-3221-5584

Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2015年11月1日発行予定)

## 南アジア

インドを中心に8カ国・17億人の人口を擁する南アジアは、近年の劇的な成長の裏に、貧困という影を抱えています。各国の成長を支援しつつ、いかに貧困削減を実現するか。幅広い取り組みの実態に迫ります。

# mundi

OCTOBER 2015 No.25

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>

バックナンバーはJICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/publication/mundi/>)でご覧いただけます。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

## 手織りの綿布、電波塔と出会う

ブッダガヤ<sup>しゃか</sup>。釈迦が悟りを開いた地、世界遺産の大菩提寺を擁する観光地だ。しかし、ブッダガヤがあるビハール州はインドで最も貧しい地域の一つで、乾期には餓死者も出る。

nimai-nitai代表の廣中桃子さんは、大学卒業の年、ボランティア旅行の途中で、インドでもひととき貧しいブッダガヤの人々に出会った。子どもの保護施設で短いボランティア活動を終え、「また戻ってくる」と伝えたとき、一人の子どもが答えたという。「外国人はみんなそう言うけど、本当に戻ってきてくれた人はいない」。

その言葉が胸に刺さり、廣中さんは、その後も毎年、現地に通った。2009年からは手作りのカディ製品を日本で売り始

めた。カディはガンジーが広め、インドの自立の象徴となった手織りの綿布だ。

現在はnimai-nitaiのブランドのほか、そのコンセプトと品質に目を留めたフェアトレードショップ「エシカル・ペネロープ」から依頼されたオリジナル商品も製作している。店舗がある名古屋テレビ塔柄のハンカチもその一つ。同店が扱うテレビ塔グッズの一つで、カディの中でも特に細い糸で織られたモスリンカディに、ブッダガヤの工房で最も腕の良い4人の女性が、丁寧な刺しゅうを施す。

nimai-nitaiの製品タグには、一つ一つに作り手の名前が書かれている。自分が手にとった製品の作り手に思いをはせることが、いつかは作り手と買い手の心をつなぐというのが、廣中さんの考えだ。



テレビ塔の形に苦戦もしたが、丁寧な手作業で仕上げていく

- ★インド製のテレビ塔ハンカチを2人にプレゼント！  
→詳細は38ページへ
- ★nimai-nitaiの製品はフェアトレードショップ「エシカル・ペネロープ」(名古屋テレビ塔1階)などで購入可能。テレビ塔ハンカチは「エシカル・ペネロープ」の限定商品。
- ★その他の取り扱い情報は、nimai-nitai HP (<http://nimai-nitai.jp/>)まで



ブッダガヤ  
インド





# 私の なんとか しなきゃ!

Vol. 60

## PROFILE

2007年、新生「J Soul Brothers」に参加。09年からパフォーマーとしてEXILEに加入。近年は役者としてドラマや舞台などで活躍中。青年海外協力隊50周年記念映画「クロスロード」(11月公開)では、ボランティアの在り方に疑問を抱く主人公を熱演した。

## 自分の目で見なければ、現実には分からない

ダンサー、俳優 **黒木 啓司** (EXILE)  
Kuroki Keiji



映画「クロスロード」の撮影で、僕は初めて開発途上国に足を踏み入れました。フィリピンには青年海外協力隊OBが同行してくれて、夜のマニラの裏道を歩いていたとき、お母さんと裸の赤ちゃんが道で寝ている光景に出会ったんです。とてもショックでした。そんな戸惑いを抱いて、現地撮影に入りました。

協力隊員の役柄を演じるということで、事前に協力隊経験者の方にいろいろと伺いました。その中で、「協力隊には言葉や文化の壁があり、ボランティアの日本人に何ができるのかと疑問を抱かれることが多い。でも、一つの取り組みがうまくいくと、信頼が生まれ、仕事が広がる」という話があったんです。映画の中でも、民族舞踊を教えてもらいながら歌って踊るシーンがあるんですが、僕が知らなかった踊りを学びながら一緒に踊ることで、周りの人たちと仲良くなれたとき、心が通じ合ったように感じました。

僕は現地に行く前、フィリピンにはきれいな観光地というイメージを持っていました。でも、実際に行ってみると、首都

マニラでは貧富の差が激しくてスラムもあり、郊外には緑があるのに水が汚染されていて飲めない所があると知りました。でも、水を汚染する鉱山の仕事が無かったら、地元の人は食べていけないし、外国人である僕らに何ができるのかと悩まざるを得ません。僕や、この映画を見てくれた人たちが、いつかあの水をきれいにするために立ち上げられる人でなければならないと思いました。

僕がこれまでやってきたボランティア活動は、EXILEのメンバーとして被災地でライブをすることが中心でした。パフォーマーとして夢を与える仕事、日本を元気にしたいという思いも、ある種のボランティアと言えるかもしれません。でも、普段の生活では、海外まで行ってボランティアをするきっかけなんて、なかなかありませんよね。「何がきっかけで、海外までボランティアをしに行くんだろう」。今回の撮影を通して、協力隊のみなさんや現地の人たちと出会うことで、僕にも少しずつ分かってきた気がします。映画の主人公・沢田も、最初は何で

人がボランティアに行くのか分からなかった、ボランティアなんて偽善だと言い切るような青年でした。でも、周りのボランティアや、開発途上国の現実を目にして、少しずつ気持ちが変わっていきます。僕は、映画の撮影を通して、沢田の経験を追体験できたと感じています。

途上国の現状や日本のボランティアの活躍は、実際に現地に行ってみなければ分からない——これが、映画の撮影を通して僕が感じたことです。この映画は実話に基づく部分も多く、協力隊のリアルに迫る作品になったと思いますが、それでも映像だけでは伝わらないものがたくさんあるんです。この映画をきっかけに、協力隊に参加し、自分の目で途上国を見に行く人が増えてほしいと思います。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で